



漆間 虹美 (うるま こうみ) 横山第一小 6年生

作品名：心の目

図 書：星の王子さま

「何で同じヘビ？」

ある日、私の描いた絵を大人達が観ていた。私は、『鏡に映る自分を見てビックリしたヘビ』を描いた。私の自信作だった。でも大人ったら、子供の感性なんてわかっていない。絵を観たしゅん間こう言った。

「二匹とも同じヘビを描くのなら、例えばこっちは野原にいるヘビで、こっちは水たまりにいるヘビなんかにしたらよかったのにね。」と。大人の圧力といったら強れつで、あの時は言い返すことができなかった。大人って本当に上辺だけしか目に見えないのかなと、疑問に思う。その答えを教えてくれたのが王子様。そう、『星の王子さま』の主人公だ。

王子様が旅をしている中、仲良くなったキツネが教えてくれたことがある。それは「肝心なことは目に見えない」ということだ。王子様が旅の間に出会う大人達といったら、自分勝手だし、物事を上辺だけしか見ていない。まるで私のヘビを批判した大人達と同じような気がして、とてもイライラした。そんな大人には、絶対なりたくない。

でも、王子様が友人になりたかった大人もいる。それは点灯夫だ。その理由はたった一つ。「人のために行動しているから」だ。王子様は何かのために行動する大人は、とても立派だと思ったのだろう。もう一人、操縦士も私は立派な大人にみえた。王子様と操縦士が井戸を見つけたとき、王子様にとって操縦士がくんでくれた水が何倍もおいしく感じたようだ。自分のために水をくんでくれたから。さばくで井戸が見つかったことよりも、自分のために何かをしてくれる友に出会えたことに、喜びを感じたのではないかと私は思う。

今までは、大人になることへの恐怖心がぬけなかったけれど、星の王子さまのおかげで、人のために行動できる大人になりたいと強く思うことができた。

大事なことは、目に見ない。だから、これまで私は間ちがった考えをもっていたのかもしれない。私のヘビを批判した大人達だって、もしかしたらそのヘビを、たいそう気に入ったからこそ、言ってくれたのかもしれない。心の中の目で見ればそういう考え方ができたはずだ。あのときはできなかった。でも、今の自分にはきっとできる。だって心の中に王子様がいるのだから。

私の世界で一番のライバルは自分だ。どんなことがあっても、自分には絶対に負けない。自分に負けたら、そこで何もかも終わってしまうから。だから、

心でしっかり見て、人のために生きよう。人のために生きている人の人生は、目には見えないけれど、キラキラと黄金のようにかがやきに満ちている。どんなに頭脳が高くても、才能があっても、それを人のために生かさなくては、王子さまのように、心が美しい人にはかなわないのだ。私も今までは、勉強をたくさんした人が、自分自身に勝てるのとばかり思い込んでいた。だけど、勝つことだけに必死になるのではなく、人のために生きようと必死になることが大事だった。そういう人を勝者というのだろう。

王子様は本の世界でたくさんのことを教えてくれた。だからこの世界では、私が星の王子様のようになって、人のために行動できる人生を生きよう。これが私の新しい夢だ。

「私のへびが美しいのは、そこに星の王子さまの笑顔があるから。」

と、今は断言したい。

前とはちがう私が今ここにいる。新しい風によって私はどんどんつき進んで行く。大切なのは、それを大人になっても忘れないことであろう。

「♪一人はみんなのために、みんなは一人のために・・・。」

歌いながら空を見上げると、王子様がにっこり笑ったように見えた。